

泡瀬南側海域では、潮干帯にイソスギナ群落、2~3m海域では、リュウキュウスガモ、ニラアマモ、マツバウミジグサ等の顕花植物の群落が形成されている。この海域の底質は荒砂、礫で形成されている。

知念村志喜屋沿岸での夏期の調査によると、砂質帯では、ミツデサボテングサ、キツネノオ、カイメンソウ等が主体をなし、岩礁帯では、ホンダワラ属の藻場がみられた。また、砂質帯の一部地域には、リュウキュウスガモ、ニラアマモ等の顕花植物の藻場が形成されている。

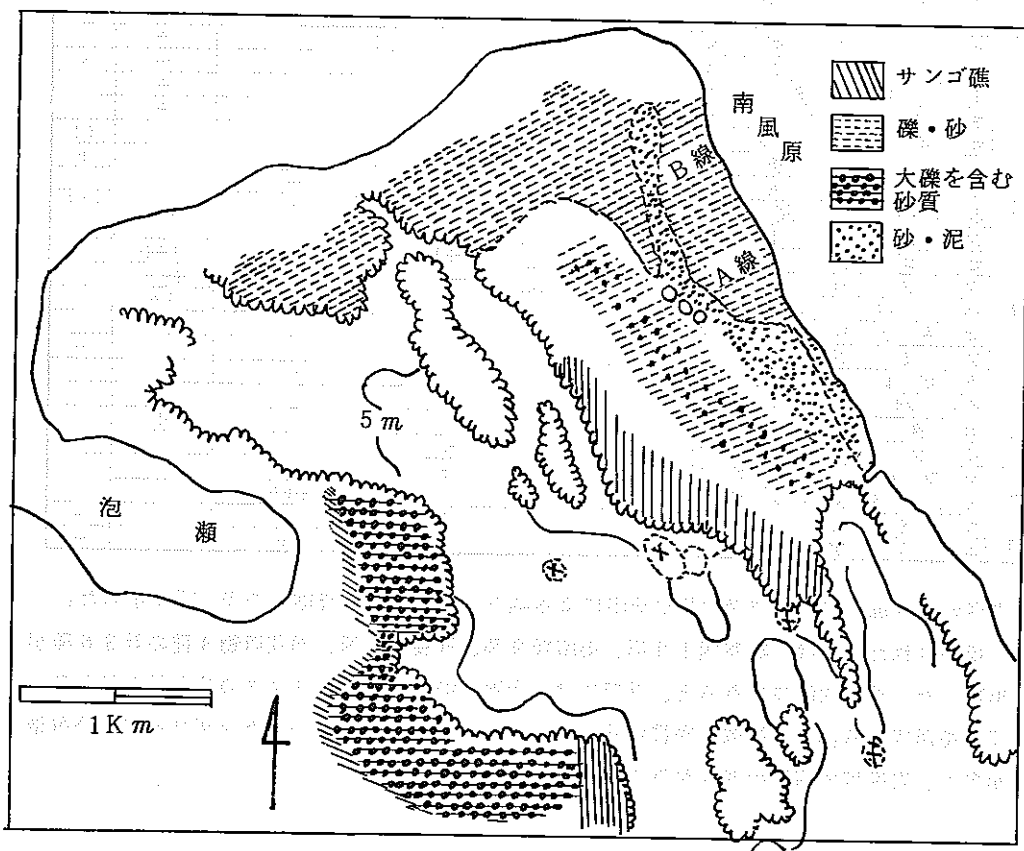
冬期には、南風原、志喜屋沿岸はカゴメノリ、フクロノリ、主体の群落が形成される。その他南風原沿岸の潮干帯には、アオサ属、アオノリ属、ヒトエグサ等の出現がみられた。また夏期に分布の多かったマツバウミジグサ、ウミヒルモ等はかなり減少する。志喜屋では、イソスギナ、フデノホ、カサノリ、アオサ属、ハバノリ(岩礁帯)、イバラノリ等の分布がみられた。

### (3) 底質

幼魚の分布量の最も多い南風原沿岸の底質を調査した。

底質の分布状況は図-10に示す通り、サンゴ礁帯、大礫を含む砂質帯、砂泥帯、礫を含む砂質帯に大別できる。特に幼魚の分布量の多い海域は大礫を含む砂質帯であり、夏期にはセンナリツタ、冬期にはカゴメノリ、フクロノリ等の藻場が形成される。

図-18 幼魚分布海域の底質



粒径 3mm 以上の礫を除いた底質の粒度組成をみるため、A線、B線を設定し、各々最大満潮線から 100m、200m、300m、400m 及びその沖合の 8 点を設定し、丸川式陶沙器でふるい別したその結果を表-11 に示した。

表-11 粒度組成

資料番号	A線				B線			
粒径	100m	200m	300m	(水深3m) 沖	100m	200m	400m	(水深1.3m) 沖
1.00~3.00	20.56	47.45	39.99	15.94	19.98	20.67	4.80	3.95
0.38~1.00	34.24	22.79	29.19	12.01	18.52	44.99	38.85	22.62
0.18~0.38	37.40	11.50	14.15	33.43	52.78	25.10	45.15	27.28
0.10~0.18	3.25	2.62	2.69	7.52	3.04	1.84	3.19	11.09
0.10 以下	4.55	15.64	14.00	31.10	5.69	7.40	8.02	35.05

A線では 300m 付近まで粒径 0.4~3.0mm の粗砂の占める割合が高く、51~70% に達する。粒径 0.1~0.4mm の細砂の占める割合は 14~41% となっていて特に 100m 線付近までが高くなっている。

A線沖は粗砂 28%、細砂 41%、泥 31% となっており、泥の含有率が高くなっている。B線はA線とはほぼ類似するが、A線より細砂含有率が高くなっている。B線沖は泥の含有率が 35% と、ほぼA線沖に類似するが、1~3mm の粗砂含有率がかなり低いのが特徴である。